《イスラエル諜報特務庁》
モサド
最強のスパイ
エンジェルと呼ばれたエジプト高官
その謎の死を追う
ウリ・バル＝ヨセフ【著】
持田鋼一郎【訳】
佐藤 優【解説】
ミルトス

《イスラエル諜報特務庁》

モサド最強のスパイ——エンジェルと呼ばれたエジプト高官　その謎の死を追う

目次

序　章　葬儀と謎　6

第1章　カイロ、一九四四～一九七〇年――始まり　12

第2章　ロンドン、一九七〇年――接触　43

第3章　一九七一年四月――軍事諜報局の介入　69

第4章　一九七一年五月――始動　94

第5章　世界中のスパイ機関の夢　121

第6章　サダトの特使　158

第7章　エジプトの戦争準備　180

第8章　最終準備とローマでの間奏曲　208

第9章　安息日（シャバット）明けの署名　229

第10章　鳩小屋計画――警告と戦争　258
第11章　アシュラフ・マルワンの栄達と没落　278
第12章　「シティ」の天使（エンジェル）、暴かれた義理の息子　315
第13章　堕（お）ちた天使（エンジェル）　349

謝辞　382
解説　ヒュミントを描いた傑作　佐藤　優　385
訳者あとがき　391

凡　例

- 訳者による注は本文中に《　》で示した。
- 邦訳がない引用文献は原書名を（　）で示した。
- 原書の注および参考文献は割愛した。

主な登場人物

エジプト

●**アシュラフ・マルワン、「天使（エンジェル）」**…ナセル大統領の義理の息子、サダト大統領の側近、モサド（イスラエル諜報特務庁）のスパイ

●**モナ・マルワン**…ナセル大統領の娘でアシュラフ・マルワンの妻

●**ガマル・アブデル・ナセル**…エジプトの大統領（一九五二～一九七〇年）

●**タヒア・ガマル・アブデル・ナセル**…ガマル・アブデル・ナセルの妻

●**サミ・シャラフ**…ナセルの首席補佐官、一九七一年に逮捕されるまでムハバラート（エジプトの諜報機関）の権力者

●**モハメッド・ハサネイン・ヘイカル**…エジプトの最有力紙アルアハラムの編集長（一九五七～一九七四年）、ナセルの親友の一人

●**アンワル・サダト**…エジプトの大統領（一九七〇～一九八一年）

●**ジハン・サダト**…アンワル・サダトの妻

●**サアド・エル＝シャズリ**…ヨム・キプール戦争時のエジプト軍参謀総長

●**モハメッド・アブデル・ガニ・エル＝ガマシ**…ヨム・キプール戦争時のエジプト軍作戦部長

●**ホスニ・ムバラク**…エジプトの大統領（一九八一年～二〇一一年）

イスラエル

●**ドゥビー、「アレックス」、「ロード博士」**（本名は今も非公開）…モサドの諜報員、マルワンの操縦者（協力者を管理する担当局員、一九七〇～一九九八年）

●**ツヴィ（ツヴィカ）・ザミール**…モサドの長官（一九六八～一九七四年）

●**フレディ・エイニ**…ツヴィ・ザミールの首席補佐官

●**シュムエル・ゴーレン**…モサドのヨーロッパ作戦本部の指揮官（一九六八～一九七四年）

●**ゴルダ・メイール**…イスラエルの首相（一九六九～一九七四年）

●**モシェ・ダヤン**…イスラエルの国防相（一九六七～一九七四年）
●**イスラエル・ガリリ**…無任所相、メイール首相の側近
●**ダヴィッド・エルアザル**…イスラエル国防軍参謀総長（一九七二～一九七四年）
●**エリ・ゼイラ**…軍事諜報局長（一九七二～一九七四年）
●**アリエ・シャレヴ**…軍事諜報調査局長（一九六七～一九七四年）
●**メイール・メイール**…軍事諜報調査局第六部局（エジプト担当）長（一九六九～一九七二年）
●**ヨナ・バンドマン**…軍事諜報調査局第六部局長（一九七二～一九七四年）
●**アーロン・ブレグマン**…ロンドン在住のイスラエル人歴史家
●**ロネン・ベルグマン**…マルワンの記事を書いたイスラエル人ジャーナリスト

■その他■

●**カマル・アドハム**…サウジアラビアのファイサル国王の甥、サウジ諜報機関の創設者、マルワンがサダト大統領とファイサル国王の関係を取り持った際のサウジの担当者
●**ムアンマル・カダフィ**……リビアの最高指導者（一九六九～二〇一一年）
●**アブデルサラム・ジャルード**…カダフィの腹心（一九六九～一九七七年）、マルワンがエジプトとリビアの関係を取り持った際のリビアの担当者
●**アブドゥラ・アル＝ムバラク・アル＝サバ**…クウェートのシェイク（首長）、億万長者、アシュラフとモナ・マルワンの友人
●**スアド・アル＝サバ**…アブドゥラ・アル＝サバの妻、マルワンの友人
●**ハフェズ・アル＝アサド**…シリアの大統領（一九七〇～二〇〇〇年）
●**ローランド・〝ダイニー〟・ローランド**…イギリスの大物実業家、一九八〇年代初頭からロンドンでのマルワンのビジネスパートナー
●**モハメッド・アル＝ファイド**…ロンドンの実業家、ローランドとマルワンの商売敵
●**クリス・ブラックハースト**…一九八〇年代のロンドンでのマルワンの活動を取材したイギリス人ジャーナリスト

序章　葬儀と謎

カイロの七月は暑い。二〇〇七年の七月一日も例外ではなかった。狭い通りは数百万の汗まみれの歩行者たちや夏休みに入った子供連れなど、膨れ上がった群衆で一杯だった。ハーン・アルハリーリの市場は、日々の買い物を急ぐ主婦たちと、名高い東洋の市場特有の魅力を見物する観光客で溢れかえっていた。カイロの八万人のタクシー運転手は街の混雑した街路に通じる小径を横切るために悪戦苦闘し、警笛を鳴らし続けた。

こうした大勢の人々のうちのほんのわずかな人々が街のモダンな郊外、ヘリオポリスにあるオマール・ビン・アブドゥル・アジズのモスクに集まっていた。モスクで行なわれている葬儀に出席している数百人の会葬者は、見かけない制服とネクタイを身に着けるか、軍服を着ていた。エジプトの政治、安全保障、それに実業界のエリートたちだった。会葬者全員がアシュラフ・マルワン博士の家族の一員、友人、仲間、それに長年にわたるビジネスの協力者、といったマルワン博士の知り合いの人々だった。

マルワンは、四日前に死んでいた。ロンドンのピカデリー・サーカスに程近い豪華なアパートの五階のバルコニーから謎に満ちた転落死を遂げていた。一九六六年にマルワンは、ガマル・アブデル・ナセル大統領の娘モナと結婚していた。大統領の家族に加わることは、まずナセル大統領の高官として、次いでナセルの死後はアンワル・エル＝サダト大統領の側近として、エジプト政界の上層部に至る道をマルワンに開いた。公務を退いてからは、疑惑に満ちた事業の経歴を積むためにアラブ世界との接触を続け、一九八一年からはロンドンに住んでいた。

マルワンの遺体は前日にカイロに到着していた。ホスニ・ムバラク大統領の高官ザカリア・アズミとアフメド・シャフィック航空相が、空港で棺の到着を待っていた。今モスクでは、ムバラク大統領の息子で明らかな相続人であるガマル（ジミー）・ムバラクが、マルワンの未亡人と二人の息子を慰めていた。これは単なる公式の儀礼ではなく、個人的な心遣いといってよかった。ガマルはアシュラフ・マルワンの息子の親友であり、二人はしばしば互いの家を訪問し合っていた。シナイ半島の南端にあるシャルム・エルシェイクで行なわれてからまだ二カ月も経っていないガマル・ムバラクの豪華な結婚式に、マルワン一家は出席していた。

ムバラク大統領自身はガーナのアクラで開催されていたアフリカ・サミットに参加していて、葬儀には参列できなかった。しかし、マルワンを「エジプトの真の愛国者」として述べた公式見解を表明していた。ムバラクは、故人が国家のために果たした偉大な貢献を個人的に知っていたと付け加えていた。エジプト諜報機関の第一人者で軍事の権威であるオマール・スレイマン将軍は葬儀に参列し、

マルワンの疑問の余地ない愛国心に対する大統領の声明に公式の承認を与えた。立法府からはエジプト議会のスポークスマンと上院議長が参列していた。軍部の将校が、実業界の大物の隣に座り、カイロ大学の総長を含む学者たちが、エジプトの指導的な日刊紙アルアハラムの主幹といった年季の入ったジャーナリストたちと共に話をしているのが見られた。

イスラム世界で最古のアルアズハル大学の大導師であるムハンマド・サイード・タンタウィ博士と、ムバラクによって任命されたエジプトの前最高宗教顧問が、葬儀を取り仕切った。そのすぐそばに、マルワンの家族がいた。未亡人のモナは黒い優雅なドレスをまとい、頭をヴェールで覆っていた。彼の同世代の多くの連中と同様、ナセルのファーストネームを与えられていたマルワンの長男ガマルは、未亡人の隣におり、その隣に弟のハニが立っていた。ハニはエジプトの前外務相アムル・ムーサの娘と結婚しており、二〇〇七年にアラブ連盟の秘書官になっていた。

モナと実家の人々との不和はよく知られていたにもかかわらず、モナの兄弟姉妹が最後の敬意を払うためにやって来ていた。しかし、アンワル・サダトの家族は一人も出席していなかった。カイロのジャーナリストたちの何人かが記しているように、これは大きな驚きだった。一九八一年十月にサダトが暗殺される以前、サダトと妻のジハンは、アシュラフとモナ・マルワン夫妻と親しい関係にあることがよく知られていた。

しかしながら、ジハン・サダトとその娘たちの欠席は比較的取るに足りないことだった。会葬者のうちの何人かが確実に気づいているように、彼らの以前の仲間であるマルワンに与えられた名誉は、

痛ましい真実を隠すうわべだけのものに過ぎなかった。あらゆるところで愛国者として公認されているにもかかわらず、会葬者が埋葬した男は、実際には愛国者とは程遠かった。マルワンはむしろ、エジプト史上、最悪の裏切り者だった。

アラブ・イスラエル紛争の歴史の中で最も激しい戦争だった一九七三年十月のヨム・キプール戦争に至る数年間、イスラエルの諜報機関モサドが、エジプトの強固な戦術組織の心臓部に「奇跡的な情報源」を持っていたことが、一九九〇年代初頭から知られ始めた。幾人かの人々――一九九三年に戦争の回想録を出版したイスラエル軍事諜報局長エリ・ゼイラ将軍といった人々――は、その情報源が、最も危機的な瞬間にモサドを裏切った二重スパイであったと主張した。そのためアラブ軍は、ユダヤ人の最も神聖な祭日であるヨム・キプールの日にイスラエルを奇襲できたというのだ。しかし、ゼイラと同程度に信頼のおける、戦争に直接関わった他の人々が存在した。彼らは、二重スパイ説は誤りであり、情報源による開戦間際の警告がなければ、イスラエルは戦争に負けていたかも知れないと固く信じていた。

時が経つにつれて、情報源とその活動実態に関するさらなる詳細が知られるようになった。二〇〇一年に、その情報源はナセルとサダト両大統領の飛び切り身近にいる人物であり、彼を知るわずかなイスラエル人によって「義理の息子」とあだ名されている人物と特定された。エジプトのジャーナリストはマルワンに、「あの有名なスパイだったのではないか」と直接尋ねた。マルワンはその主張を

否定したが、スパイの身元の暴露に大きな役割を果たしたロンドンのキングス・カレッジのイスラエル人歴史学者アーロン・ブレグマンは、「奇跡的なモサドの情報源」は間違いなくマルワンだとエジプトのジャーナリストたちに断言した。

マルワン自身は告発を否定し続けた。しかし、二〇〇七年六月七日にテルアビブで開かれた裁判の中で、法廷はマルワンがその情報源であったことを肯定した。マルワンは自分の首に掛けられた縄が引き絞られてゆくのを感じ始めた。その三週間後にマルワンは死んだ。

少なくともオマール・スレイマン将軍のような葬儀に参列したうちのごくわずかな人は、誰が、なぜ、マルワン排除の命令を下したのかよく知っていた。結局、マルワンの暴力的な死は、エジプトの指導層がマルワンの裁判に巻き込まれ、輝かしい経歴を持つエジプト支配層のエリートの一員――妻が伝説の人物ナセルの娘であり、長男がムバラク大統領の後継者といってもいい人物のビジネスの相手であり、次男がアムル・ムーサの娘と結婚している――が、エジプトとイスラエルの戦争の天下分け目の時期にモサドのスパイであったことを公式に認めるという窮地を救った。

二〇一一年初頭のムバラク政権崩壊後、誰がマルワンを抹殺する命令を下したかという疑問に対する回答が暗示された。エジプトの雑誌ローズ・アルユスフによれば、マルワンの謎の死後、記者に「私はマルワンの忠誠心を疑わない」と述べた人物は、ムバラク本人だけだった。

二〇〇九年五月十日、アメリカのCBSテレビの番組「六十分（シックスティ・ミニッツ）」が、アシュラフ・マルワンの

栄達と没落、そして彼の死を巡る論争を追った。「完全なスパイ」と題された番組の終了間際、CBSのスティーブ・クロフトは、「では最後に、誰がマルワンを本当に裏切ったのか？　誰が彼を殺したのか？　もし真実がマルワンと共に埋葬されていないのなら、どこかの最高機密の金庫に埋葬されているに違いない」と言い、解きがたい疑問を述べることで番組を要約した。

この本は、真実を暴露する。真実を得るためには一九四四年のカイロまで戻らなければならない。その時すべてが始まったのだ。

解説　ヒュミントを描いた傑作

佐藤　優

インテリジェス（諜報活動）には、さまざまな技法がある。盗聴や信号傍受を中心とする「シギント」（SIGINT）、人工衛星や無人偵察機が撮影した画像分析による「ヴィジント」（VISINT）、新聞、雑誌、テレビ、政府刊行物などの公開情報（Open Source）による「オシント」（OSINT）、また最近ではウェブサイトを情報源とする「ウェビント」（WEBINT）などがある。しかし、いつの時代もインテリジェンスの王道は、人間によって情報を得る「ヒュミント」（HUMINT）だ。イスラエルの対外インテリジェンス機関であるモサド（諜報特務庁）はヒュミント能力の高さで有名だ。

本書は、一九七三年十月六日に勃発した「ヨム・キプール戦争」（第四次中東戦争、同月二十五日に終結）をめぐるヒュミントを描いた傑作だ。エジプトの最高指導者ガマル・アブデル・ナセル大統領の娘婿で、ナセル死後、後継大統領となったアンワル・サダトの側近だったアシュラフ・マルワンはイスラエルのスパイで、エジプトがイスラエルを攻撃するという確実な情報を提供した。本書の副題にも言

及されている「エンジェル」というのは、マルワンのコードネーム（偽名）だ。インテリジェンスの歴史に残るこの事件をウリ・バル＝ヨセフ氏が丹念に解明する。バル＝ヨセフ氏は、元インテリジェンス・オフィサー（諜報局員）なので、この特殊な世界の内在的論理がよく分かる。そのことが本書末尾の謝辞を読むとよく分かる。

〈この物語への私の個人的な関与は一九九八年に始まった。それは、予備役将校として務めていたイスラエル軍事諜報調査局から、一九七三年における諜報活動の失敗原因について最高機密の研究を進めるよう命じられた時だった。私が接することのできた書類の中には、戦争前の数カ月間に信号、映像、人間などのあらゆる手段を介して収集された何百もの情報報告からなる膨大なファイルがあった。それは差し迫った脅威の明確かつ広範にわたる実態を提供していた。この秘密の宝の中で、「ホーテル」と呼ばれるモサドの情報源によるレポートは、ひときわ輝いていた。

当時、私が研究を進めている間、その正体について一度も尋ねたことはなかった。私がインタビューした全員が、私と同様、それを最高機密として扱い続けた。しかし五年も経たないうちに秘密が明らかにされ、アシュラフ・マルワンの正体が知られるようになった。二〇〇七年六月の彼の死は、スパイとしての彼の人生を徹底的に調査する上で、主要な障害を取り除いた。アメリカのＣＢＳの番組「六十分（シックスティー・ミニッツ）」（二〇〇九年五月に放送）の制作チームからマルワンについての物語制作への助言を求められたのを機に、私は彼の物語をより深く理解しようと決心した。〉（本書三八二〜三八三頁）

マルワンは、モサドが工作を仕掛けて獲得した協力者ではない。マルワン自身が協力者になりたいとイスラエルに接触してきた「飛び込み」の協力者である。本書を読んでもマルワンがイスラエルの協力者となる動機がいまひとつ鮮明にならない。マルワンの内面に、危険な場所に身を置いて、その緊張を楽しむというような、独特の破壊衝動があったようにしか思えない。もっともこのような破壊衝動から協力者になる人を私も何人か見たことがある。重要なのは、モサドがマルワンの情報価値を正確に評価したことだ。もっともアマン（イスラエル軍事諜報局）の出身者には、マルワンはイスラエルを攪乱（かくらん）する使命を帯びた二重スパイだったという見方もある。私は、マルワンはイスラエルの協力者で二重スパイではないとするバル＝ヨセフ氏の解釈が正しいと考える。

この事件の背景には、国際政治の変動がある。

〈一九七二年七月、ソ連から抑止兵器を手に入れることに繰り返し失敗した後、サダトは突然、一九七〇年以来エジプトに駐留していた赤軍部隊が帰国すると発表した。ソ連は、エジプトを援助してイスラエルの優勢な空軍力に拮抗できるよう、最新鋭の地対空ミサイルの担当者とソ連製の戦闘機・航空機と共に赤軍を派遣していた。しかしクレムリンは、エジプトの安全保障に関する究極の決定については、エジプトの自主裁量を認めないできた。ソ連の部隊がエジプトの空を守っている限り、エジプトの戦争に関してソ連が拒否権を行使したからである。その事実をサダトは知り尽くしていた。その上、外交交渉によるシナイ半島返還の見通しが薄らぐにつれて、エジプトの戦争をする選択肢に課せられたソ連の足枷はますます痛みを増した。〉（一八〇頁）

エジプトとソ連の関係が不安定になったので、時間が経過すると軍事バランスはイスラエルに有利になるという焦りがサダトをして対イスラエル戦争に踏み切らせる動機になったのである。

マルワンとモサドの操縦者（協力者を運営するインテリジェンス・オフィサー）のやりとりも興味深い。化学記号を符号にしている。

〈ドゥビーは、明確なメッセージを受け取ったと悟った。マルワンが事前に攻撃を警告できるよう設定された手順の一つに、脅威の具体的な性質を明確にするための暗号を選んでいた。マルワンは化学を学んでいたので、警告には普通の会話に交えて元素名を用いることに決めていた。戦争に関する総称は「化学物質」だったが、より具体的な用語が決められていた。即時攻撃の脅威の場合は「カリウム」、それほど緊急でない警告には「ヨウ素」、スエズ運河を渡らずにシナイ半島へ空襲を行なう場合は「ナトリウム」を使うことになっていた。

一部の解説者は、ドゥビーがここで重大な間違いを犯したと評している。彼はモサド長官をロンドンに連れて行く基準として、単なる「化学物質」ではなく特定の元素名をマルワンに求めることができたはずである。しかし彼はそれをしなかった。ドゥビーはイスラエルで緊迫した状況が刻々と進展していることを知らなかった。彼が知っていたのはマスコミの報道だけで、戦争の可能性について公式の報告はなかった。ドゥビーには選択肢があまりなかったのもある。マルワンには時間がなく、近くに人がいることを理解した。さらに、マルワンがもっと正確な情報を持っていれば、違う暗号を使

ったはずだ。そうしなかったということは、それほど具体的な警告ではないとの判断だった。いずれにしても、マルワンが翌日ツヴィ・ザミールに会った時、より具体的なことを言うだろうと最終的にドゥビーは結論した。〉（二三〇〜二三一頁）

マルワンが「カリウム」と伝えていれば、イスラエルは事態をもっと深刻に受け止めた。モサドの操縦者は、マルワンから戦闘開始時刻を知ろうとする。しかし、マルワン自身もその正確な時刻を知らなかった。

〈ザミールは、それほど差し迫った問題ではなかったが、作戦実行時刻についても質問した。イスラエルが長年見てきたエジプトのあらゆる戦闘計画では、作戦は日没時刻に実行されることになっていた。シナイ半島への大規模な空襲を実行するのに十分な日の光が残っており、イスラエル空軍による効果的な反撃を妨げる暗闇が下りる直前の時間だった。マルワンの報告によると、今回の計画も同じだった。一九七三年十月六日の日没は、イスラエル時間で午後五時二十分だった。

しかし、マルワンも操縦者たちも知らなかったが、二日前にエジプトの戦争相はシリアの大統領と面会し、シリア軍とエジプト軍の作戦調整の後、午後二時に攻撃を開始することで合意していた。

ミーティングは二時間以上に及んだ。マルワンは自分のホテルに戻った。モサドの捜査官たちが彼を監視し続けたが、翌日の土曜日、マルワンはエジプトに帰国した。〉（二五三頁）

いずれにせよマルワンの情報がイスラエルの最高指導部に届いていたので、アラブ連合軍による奇襲に対する備えをイスラエルも部分的に行なうことができた。当時においても、イスラエルの戦力はアラブ連合軍を圧倒していたので、マルワン情報がなくてもイスラエルが敗北することはなかったであろう。しかし、マルワン情報によって、イスラエルの被害が著しく減少したことは間違いない。

二〇〇七年六月二十七日、ロンドンの高級住宅の五階からマルワンは転落して死ぬ。バル＝ヨセフ氏は、エジプト当局による暗殺と見る。説得力のある見方だ。インテリジェンスの世界で、裏切り者は必ずそのツケを払わされるのである。

（作家・元外務省主任分析官）